

ベルクソン哲学における「揺れ」の発展的機能について⁽¹⁾

磯部悠紀子

序

ベルクソンの哲学には、「揺れ」という言葉、特に原語で *oscillation* と表記される揺れが、ある種の一貫性のもとに用いられる傾向が存在するように思われる。この傾向は四つの主著⁽²⁾すべて、すなわち『意識に直接与えられたものについての試論』(以下『試論』とする)、『物質と記憶』、『創造的進化』、『道徳と宗教の二源泉』(以下『二源泉』とする)を通じて見られるが、この言葉の積極的な解釈を行った先行研究は数少ない。これまでの論者の多くは、現代物理学に対するベルクソン哲学の影響の大きさを論じる文脈で揺れを取りあげることはあるものの、言葉の与える即物的な印象がベルクソン哲学の適切な理解を妨げるおそれがあるという理由で建設的な解釈を避けている⁽³⁾。だが実際に各著作を通覧してみると、とりわけ *oscillation* と表記される揺れが出現する箇所の中には、むしろベルクソン哲学の理解を促す解釈が可能と思われるものもあり、揺れの全容が必ずしも明らかにな

っているとは言いがたい。

そこで本稿は、特に oscillation と表記される揺れがベルクソンの四つの主著を通して持ちうる一貫性の解明を試みる。具体的には、この言葉の積極的な解釈を行っているユリア・ポドロガの研究を手がかりに、ベルクソン哲学の中心的概念である「持続」(durée) に込められた生成のニュアンスを表現する役割を揺れという語に見出したい。というのもポドロガは、ベルクソンによって「持続の直観」と名づけられた意識状態を追究する中で、揺れという一見すると固定的な空間を想起させる表現が、実はそうした印象を持たせない意図において用いられていることを明らかにしつつ、持続に通じる資質を持つ萌芽的な概念性をその表現から読み取るとともに、揺れがベルクソン哲学の展開に沿って生成変化する概念であることを示唆しているからである。ポドロガの研究は四つの主著すべてを参照しているわけではないが、この生成変化する概念という主張が妥当であるなら、同様のことが、主著すべてを通じた一貫性のもとで確認されるはずである。

これを検証するために本稿では、揺れが出現する箇所を、ベルクソンの四つの主著の中から順に一つずつ取り出し、想定される一貫性の存在を検証していきたい。第一節では『試論』における揺れを、第二節では『物質と記憶』における揺れを、第三節では『創造的進化』における揺れを、第四節では『二源泉』における揺れを、それぞれ取りあげる。

一 『試論』における揺れ・振り子の揺れから考える

ベルクソン哲学の中心的概念である持続は、『試論』の第二章で初めて詳細に論じられる。そこでまず本節では、ベルクソン哲学の出発点における持続と揺れの関わりを明らかにすべく、最初の主著である『試論』の第二章に見られる揺れに着目する。

最初に持続について簡単に説明しておきたい。ベルクソンは『試論』第一章で、感情や感覚を多様な角度から分析し、その表現に二つの観念が関係していることを明らかにする。一つは量の観念である。これは空間の観念を前提としており、感情や感覚を大きさとして意識に捉えさせるものである。もう一つは質の観念である。これは相互に入りまじった諸要素から構成される純粋な質であるので、空間とは無縁であり、時とともに生成し変化する流動的なニュアンスを特徴とする。こうした区別に基づき、質的な生成変化の観点から見られた時間を、ベルクソンは「持続する時間」あるいは単に「持続」と呼ぶ。ベルクソンによれば、時が過ぎるまま、現在の意識状態と先行する諸状態とのあいだにいかなる継ぎ目も感じられないとき、意識は純粋な持続を把握しているときである (D174-75)。

揺れの語が見られるのは第二章の中盤においてである。質的な観点に基づく持続は量的に計測されえないことを、ベルクソンは振り子時計の振り子の揺れの例を用いて説明する (D178-82)。その中でも振り子の揺れが眠気を催させる理由について述べられている箇所には、持続を把握する意識状態の特徴が示されており、持続と揺れ

の関わりを知ることができる。

振り子の規則的な揺れ (*les oscillations régulières du balancier*) が我々に眠気を催させるとき、この効果を生み出すのは、聞こえた最後の音、知覚された最後の動きなのか。おそらくそうではない。「……」では「この効果を生み出すのは」最後の音や最後の動きと並置されている、先立つ音や運動の記憶なのか。しかしこの同じ記憶は、あとになれば均一の音や動きと並置され、効果を発揮しないままにとどまるだろう。それゆえ、音は相互に構成し合っていたのであり、量としてのそれらの量によってではなく、それらの量が示した質によって、すなわちそれら全体のリズムを持った組織化によって作用したということを確認しなければならない (DIT8-79、強調は引用者による)。

眠気を催させるのは「聞こえた最後の音、知覚された最後の動き「……」ではない」とベルクソンは言う。これは、次々と現れては消える振り子の揺れや、揺れに伴う音の一つひとつが、単独で眠気を催させるのではないとベルクソンが考えていることを意味している。もし振り子の揺れや音が単独で意識に捉えられているなら、その意識は現在だけに注目していることになる。それは目の前にある揺れの、先立つ揺れからの切断を意味する。たとえばそれぞれの揺れや音が記憶の中で隣接しているとしても、それらは「効果を発揮しないままにとどまる」。つまり「並置」という語が表すように、揺れや音の記憶は、相互の関連づけなしにただ横に置かれているに過ぎない。そのようにして振り子の揺れが意識に捉えられているなら、いくら振り子が揺れ続けても眠くなることは

ないだろう。相互の繋がりが断たれていると、一つひとつの振り子の揺れは何の脈絡もない要素の寄せ集めに終始し、時間の経過とともに量が増えても、それらは質的生成に関与しない。意識状態に継ぎ目があり、持続を把握していないとベルクソンが考えるのはこのような状態のことである。持続を把握していない意識状態では、眠気も起こらないということだ。

これに対して、眠気を催させるのは「量が示した質」、言い換えるなら、時間の経過とともに増えていく揺れや音の合成によって次第に生み出されていく全体的な印象の変化である。振り子の揺れが連続して意識に捉えられているなら、その意識はもはや現在だけに注目しているのではなく、過去から引き続くものとして現在を認識している。目の前にある揺れは常に一つだが、意識の中ではそれぞれの揺れが先立つ揺れとの繋がりを保っているという意味である。「組織化」という言葉が表すように、すべての揺れと音は、別々の要素でありながらも一つのまとまりを構成するため、時間の経過とともに量が増えれば、量の変化が質的生成に直結する。眠気を催させるこのような意識状態こそ、純粹な持続を把握している状態だというのがベルクソンの主張である。

ではここから持続と揺れの関わりをどのように読み取ることができようか。鍵となるのは「リズムを持つた組織化」という表現である。まず、「リズム」は揺れの原語である *oscillation* に由来するだろう。というのも、*oscillation* は往復性および規則性といったニュアンスを有するからである。ゆえに、ここで用いられている「リズム」は、揺れが持つ物理的なイメージを象徴すると解される。一方「組織化」は、先の段落で説明したように質的生成に直結しており、持続の特性を示す。このように、表面的には相容れない二つの言葉が、単に組み合わせられるだけでなく持続を類推させる文脈で使われていることが分かる。したがって、『試論』における持続と揺

れは、対立する性質を持ちながらも結びついて作用しうる関係にあると推測されるだろう。

二 『物質と記憶』における揺れ…一般観念の問題から考える

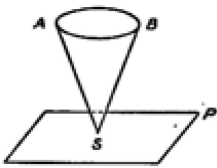
続いて二番目の主著である『物質と記憶』に移る。揺れの語は第三章で集中的に現れる。「我々の仕事の出発点は、本書の第三章に見出される分析のうちにあった」(MINA)とベルクソンが初版の序で述べるように、第三章では中心的な議論がなされており、持続と揺れの関わりについても何らかの手がかりを得ることができると思われる。そこで本節では、『物質と記憶』第三章に見られる揺れに注目したい。

揺れが登場する箇所の主題は一般観念である。ベルクソンによれば一般観念の検討には常に一つの困難が付きまとう。それは唯名論と概念論が陥っている悪循環、すなわち「一般化するにはまず抽象しなければならないが、有効に抽象するためには、すでに一般化できるのでなければならぬ」(MINA)という循環である。ここで述べられている唯名論は、一般観念の存在を否定的に捉え、名前だけが多くのものに共通する一般的な印として存在すると考える立場を指す⁽⁹⁾。また概念論は、一般観念の存在を肯定的に捉え、それを思考に固有の形式あるいは機能とみなし、単なる印にはとどまらないと考える立場を指す⁽¹⁰⁾。一般化することと抽象化することに関するこのような対立が、結果として循環を生じさせるといえる。ベルクソンはこの循環からの脱出を目指し、自らの記憶論を駆使して一般観念について議論する。そうして引き出される一般観念のあり方を表現するために、揺れは用いられている。

一般観念は、頂点Sと底面ABのあいだで、絶えず揺れるだろう (l'idée générale oscillera) (MN1180^o 強調は引用者による)。

この一文を含む議論の要点から先に説明しておこう。ベルクソンの主張は、一般化への出発点としての抽象と到達点としての抽象とが異なるということに集約される。これは先述の唯名論と概念論による一般観念の定義に見られる問題と関係する。実際、両者は相反する内容を主張するにもかかわらず共通の公準を認めており、「どちらの理論も、我々が個別の諸対象の知覚から出発することを前提としている」(MN115)。ベルクソンは、我々の認識の仕組みを正しく捉えていないとしてこの前提を批判する。というのも、知覚は最初から完全なわけではなく、記憶が再認される過程を経て成立するからである (MN1107)。一般観念は、不完全であった知覚が完全になるのと同じ過程において形成されるのだ。

引用文においてベルクソンは、一般観念が形成される際の特徴を踏まえ、円錐SAB (MN1169) という図に基づいて再認の過程をたどっている。円錐SABとは、ベルクソンの記憶論の理解に欠かせない非常に重要な図である。頂点Sは身体を表し、底面ABには記憶の全体がある。頂点Sには知覚があり、現在の状況を把握しながら、なすべき反応の根拠を記憶力に対して要請する。要請を受けた記憶力は、SとABのあいだに配置されている記憶を参照し、現状に合致する記憶を知覚へと送り返す。こうして再認が成立する。



一連の再認の過程に注目してみると、我々は意識の機能がSとA Bのあいだを行き来していることに気付く。Sから出発した記憶力は、情報を探しながらA Bの方へ向かい、情報を取得したのち、再びSへと戻るからである。要するに一般観念は「この進展の途中で」(MN179)、「頂点Sと底面A Bのあいだで絶えず揺れ動く」ことで形成されていると言える。

では持続と揺れの関わりについて考えたい。実のところ、『物質と記憶』の中ではそれが直接的に示されることはないのだが、我々はこの関係を一つの主張から間接的に証明することができる。ベルクソンは知覚に関する叙述を行う場面で、しばしば次のように述べる。「知覚がどれだけ短時間のものであると想定されようとも、実際、それは常に、ある一定の持続を占める」(MN30)。「持続を占める」とは、単純に言えば「時間がかかる」と同義であり、前節で扱った持続の定義を参考にするなら、経過する時間における質的な生成変化の観点を強調する表現だと推測できる。知覚は最初から完全であるわけではなく、完全になる過程には進展が存在するのであった。すなわち「知覚が持続を占める」と言えるなら、それは経過する時間の中で知覚が質的に生成されることを示していよう。ここで円錐S A Bを用いた説明を思い起こそう。知覚が完全になる過程では、SとA Bのあいだを記憶力が行き来しており、その動きは揺れという語で表現される。したがって、知覚が質的に生成されるのなら、揺れは持続において行われていると言うことができる。我々はここに持続と揺れの共存を見出す。

記憶力が参照するのは過去の記憶であるから、それらが表象において再生されるという意味では、揺れは一種の繰り返しを表すだろう。しかしながら、再生される時点は常に現在であり、状況は持続に沿って絶えず更新されていく。『物質と記憶』の揺れは、行ったり来たりを繰り返して古いものを再利用しながら、新しさに対応す

る手段を提供する揺れである。ゆえに『物質と記憶』では、揺れの存在なしには意識の働きを考慮しえないという点で、揺れは持続と一体であるかのような相を呈すると言える。

三 『創造的進化』における揺れ…植物と動物の関係のあり方から考える

三番目の主著である『創造的進化』へと進もう。ここでベルクソンの関心は生命の進化へと移る。ベルクソンは第一章において、二種類の進化論、すなわち機械論の見地に立つ進化論と目的論の見地に立つ進化論が陥っている誤りを指摘する。機械論も目的論も、とりわけ近代以降、諸存在の変化および発展についての議論における拠り所となってきた考え方である。前者は原因と結果の連鎖によって世界が構築されていると考え、後者はある完成形に向かって世界が成長していくと考える。しかしこれらはいくくでも世界で起こる現象を解釈するための手段に過ぎない。我々の行為一つを取ってみても、機械論や目的論による解釈に完全に合致するものはなく、これらの考え方ですべてを説明しつくすことは不可能である。したがってベルクソンによれば、真の意味で生命を論じるには、機械論の見地と目的論の見地を越えなければならぬ。⁽¹¹⁾

生命が機械論にも目的論にも当てはまらない性質を備えているなら、進化は一本の線の上をなぞるように行われてきたのではないはずだ。生命はさながら炸裂する砲弾のように放射状の軌道を描いて進化してきたとベルクソンは言う(EG98)。複数の種が放射状に分岐しながら構成されてきたならば、それらは相互に区別される一方、峻別の不可能な関係にあるだろう(EG104)。ベルクソンは第二章で植物と動物の区別について論じ、分岐の際

には繊細な動きがありうると説明する。その中で揺れの語が用いられている。

さて、動物の細胞と植物の細胞とが共通の株から出たこと、生命を持った最初の有機体が、植物の形態と動物の形態とのあいだで、同時に両者に属しながら揺れ動いた (oscille) こと、これは疑う余地がないように我々には思われる。「……」〔植物界と動物界という〕二つの世界の進化の特徴的な諸傾向は、分岐してはいるが、今日もなお植物と動物において共存している。割合だけが異なる (EC113-114、強調は引用者による)。

植物と動物とが起源と傾向を共有しているなら、区別が難しいのは当然である。ベルクソンはこれに先立つ箇所において、「いかなる明確な特徴も植物と動物を区別しない」(EC107)とも述べている。とはいえこの主張は両者の区別の放棄を意味するのではない。ベルクソンがこうした手法を取るのは、最も適切な仕方であり、それぞれが持つ傾向の多少に応じて両者の定義を試みるためである。

ではベルクソンは植物と動物のあいだのどのような傾向に注目しているのだろうか。まずは栄養摂取の仕方に関連する、植物の固着性と動物の可動性である (EC107-110)。植物は土や水から炭素や窒素をそのまま取り込むことができるため移動する必要がない。一方、動物は植物のように取り込むことができないので、植物や他の動物を求めて移動しなければならない。菌類や食虫植物のように植物と動物の両方の特性を備えた例も存在するので完全な区別は可能ではないが、固着性と可動性は植物と動物を区別するための一つの目印になる。

次いでベルクソンは、有機体は自ら動く限りにおいて意識的であると考え、意識の有無に注目する (EC111-

113)。植物は移動せず感覚器官も発達しないため、意識は眠っている。反対に、動物は移動するので意識は目覚めている。よって、植物は無意識的な方向に、動物は意識的な方向に進化してきたと考えることができる。ここでも藻類の遊走子のような例が完全な区別を妨げる。しかしながら、植物においてはその系列を下降して初めて意識が見つかるのに対して、動物においては最も高等なものに最も優れた意識が備わっている。植物は無意識的な傾向を持ち、動物は意識的な傾向を持つことが明らかである。

つまり植物と動物の差異は時間が経過するにつれて徐々に明確になっていったと考えられる。現在は別々の形態をとっているが、起源を共有した状態から完全に分岐した状態に移るまでには、両者のあいだで傾向が交錯する時期があっただろう。この箇所で用いられている揺れの語は、植物と動物のあいだで差異が生じていく様子を描写しながら、進化が持続においてなされていることを一語で表現していると推測される。

ベルクソンが検討しているように、植物と動物のあいだに完璧な区別は存在せず、それらのあいだにあるのは諸傾向の程度の差異のみである。これらの程度の差異は、先述のように、起源を共有していた植物と動物とが長い年月をかけて分岐していく過程で生じたものである。この観点に立つならば、植物の形態と動物の形態のあいだに見られる揺れ動きは、生命の運動の一部であるだろう。また菌類や食虫植物、遊走子など、植物と動物の二つの領域に跨る生物の存在は、生命が揺れながら差異を形成していったことを示している。ゆえに『創造的進化』において、揺れは持続とともに進化の一端を担う。こう言ってよければ、揺れが進化の多様性を生み出す要因の一つとなっているとみなすこともできるだろう。

四 『二源泉』における揺れ…社会の進化から考える

それでは最後の主著である『二源泉』を見ていきたい。『二源泉』で主題となるのは道徳や宗教といった社会的な観点から見た進化である。『創造的進化』で提示された諸傾向の分岐という論点が引き継がれつつ議論がなされ、分岐した諸傾向の発展の仕方の違いが示される。

『創造的進化』における生物学の観点では、完全に分岐した諸傾向は再び合流することなく、別々の組織の中で発展を遂げる。これをベルクソンは次のようにまとめている。「生命の一般的な進化においては、諸傾向は多くの場合〔……〕異なる種の中で発展する」(DS314)。前節で見たように、諸傾向は揺れながら進化する。しかしいったん別の種になったあとは、もはや揺れながら相互に影響し合うことはない。

これに対して『二源泉』における社会的な観点から見た場合には事情が異なる。諸傾向は、完全に分岐したあとも、同一の共同体や個人のうちで相互に刺激を与え合いながら発展していく。「心理的・社会的な生命の進化では〔……〕分離によって構成された諸傾向が進化するの、同一の個人、あるいは同一の社会においてである。またそれらの諸傾向は通常、交互にしか発展しない。もし、よくあるようにその傾向が二つであるなら、まず注目されるのは、とりわけ二つのうちの一つである。一方の傾向とともに、人はそれなりに遠くへ、たいていはもっとも遠くまで進んでいくだろう。次いで、この進化の途中で獲得されるであろうものとともに、人はうしろに残してきたもう一方の傾向を探しに戻るだろう。今度は、最初の傾向を放っておいてもう一方を発展させるのだら

う。そしてこの新たな努力は、新しい獲得物によって強化されつつ、最初の傾向を再び取りあげて、より遠くへと押し進めることができるまで続くだろう」(DS314)。

したがって、社会の中での諸傾向の進化は、ベルクソンによって一種の規則性のもとに捉えられていることが分かる。『二源泉』第四章では、この規則性が振り子の揺れに基づいて説明され、そこで揺れの語が用いられる。

人は完全に二つの傾向の一方の上にあつて、まるで重要なのがその傾向だけであるかのようである。ややもすれば、それだけが確実で、他方はその否定に過ぎないと言いたげである。もし「人が」事物をこの形式のもとに置きたいなら、他方は実際に反対のものとなる。「……」進歩は、二つの対立するものあいだの揺れ (*une oscillation entre les deux contraires*) によつてなされたことが確認されるだろう。「……」振り子が発点に戻るときには、ある収穫が実現されたのだから (DS314-315、強調は引用者による)。

ここでベルクソンが述べている揺れは、前進を実現するための条件と捉えられる。擬人的な表現を用いることが許されるなら、社会が振り子のように左右交互に重心を傾けつつ前進することによって諸傾向の発展が促進されるイメージだろう。人間の歩行を思い浮かべてみよう。⁽¹²⁾ 前に向かって歩くには、重心を移動させて、左足と右足を交互に前に出す必要がある。身体の片側に体重がかかったままでは次の一步を踏み出せないからである。またそのとき重心は身体の片側から反対側へと一気に飛び移ることはない。いったん身体の中心へ戻り、あらためて反対側へと移動する。この繰り返しによって初めて歩行が成立する。身体を観察すると、重心の移動に沿って

左右に揺れているのが分かるはずである。

右と左は対立するものを表すわけではない。しかし、このような歩行の仕組みを考えた場合、どちらかに体重がかかっているときには、次に体重をかけることができるのは反対側しかない。前進するには交互に体重をかけるを得ないので、右と左はおのずと対立する構図のもとに置かれるようになる。また、重心は移動する際に必ず身体の中心を通過する。つまり前進するには重心が一度出発点を經由する必要があるのだ。こうしてみると、ベルクソンが述べるように、「振り子が出発点に戻るとき」、すなわち振り子が鉛直線上に戻るときには、「二つの対立するもののあいだの揺れによって」、前進という「収穫」が実現されることが分かるだろう。

このように『二源泉』における揺れは、ある一つの傾向が始まってから終わるまでの一連の時間の流れを示している。それゆえ、揺れが繰り返されるとしてもそれは単なる往復にとどまるものではなく、質的变化を伴った進歩となる。この見地に立つなら、持続と揺れとはもはや分離不可能であるとさえ言えよう。

結

以上のように、本稿はベルクソンの四つの主著に見られる揺れの語に注目した。各節での議論を振り返ったのちに、この語に関して想定される一貫性についてまとめた。

第一節で取りあげたのは『試論』における揺れである。ここでは振り子時計の振り子の揺れが眠気を催させる理由について書かれた箇所に注目し、単に物理的に過ぎないと思われた揺れが、捉え方によっては持続の特性で

ある質的生成に直結する効果を生み出すことを明らかにした。第二節で取りあげたのは『物質と記憶』における揺れである。ここでは一般観念の形成過程について書かれた箇所に注目し、一般観念が形成される際の意識の特徴的な働きが揺れという言葉によって表現されていることを明らかにした。第三節で取りあげたのは『創造的進化』における揺れである。ここでは進化の過程で想定される植物と動物の分岐について書かれた箇所に注目し、長い年月をかけて両者のあいだで差異が生じていく様子が揺れという言葉によって描写されていることを明らかにした。第四節で取りあげたのは『二源泉』における揺れである。ここでは社会の中での諸傾向の進化について書かれた箇所に注目し、各々の傾向が発展する際の条件となる規則性が揺れという言葉によって表現されていることを明らかにした。

これらの議論から確認できるのは、『試論』から『二源泉』へとベルクソンの思想が発展するにつれて、揺れの持続との関係のあり方が変化していることである。『試論』に見られる揺れは、持続と対立する性質を持ちながらも結びついて作用しうる関係にある。二番目の主著である『物質と記憶』に見られる揺れは、それなしには意識の働きを考慮しえないという点で、まるで持続と一体であるかのような相を呈する。三番目の主著である『創造的進化』に見られる揺れは、持続とともに進化の一端を担っている。最後の主著である『二源泉』に見られる揺れは、それ自身が質的变化を伴った進歩であるという点で、もはや持続と分離不可能でさえある。

こうしてみると、それぞれの揺れには常に何らかのかたちで持続との結びつきがあり、著作から著作へと移るにつれて結びつき方が強くなっていくことが分かる。本稿の冒頭でポドロガの主張から推測したように、揺れは持続に通じる資質を持つ萌芽的な概念性を有する語であること、ベルクソン哲学の展開に沿って生成変化する概

念であることが、四つの主著すべてを通じて一貫性のもとで確認されたと言えるだろう。

註

- (1) 本稿は、筆者が二〇一三年度に聖心女子大学に提出した博士学位申請論文「ヘルクソン哲学における『揺れ (oscillation)』—持続との関連で見るその発展的機能—」の内容に基づいてその一部を展開し、加筆・修正を行ったものである。
- (2) ヘルクソンの著作からの引用箇所および参照箇所は、略号とページ数を () に入れて文中に記す。各著作の略号は以下のとおりである。
DI : *Essai sur les données immédiates de la conscience*, coll. « Quadrige », Paris, PUF, 2007 (1889).
MM : *Matière et mémoire*, coll. « Quadrige », Paris, PUF, 2008 (1896).
EC : *L'évolution créatrice*, coll. « Quadrige », Paris, PUF, 2008 (1907).
DS : *Les deux sources de la morale et de la religion*, coll. « Quadrige », Paris, PUF, 2008 (1932).
- (3) Milič Čapek, *Bergson and Modern Physics*, Dordrecht, D. Reidel Publishing Company, 1971, p. 268. 守永直幹『未知なるものの生成 ヘルクソン生命哲学』春秋社、二〇〇六年、三三三〜三五頁など。
- (4) Ioulia Podoroga, « Les trois modes perceptifs et le concept d'image chez Bergson », *META, Research in Hermeneutics, Phenomenology and Practical Philosophy*, Vol. 1, No. 2, Iasi, Romania, Al. I. Cuza University Press, 2009, pp. 351-367.
- (5) これより「揺れ」は原語で *oscillation* と表記されるものを指すこととする。
- (6) 「持続の直観」については第一節および註(8)を参照。
- (7) 『物質と記憶』と『創造的進化』では *Ioulia Podoroga*, « Les trois modes perceptifs et le concept d'image chez Bergson », p. 367)。
- (8) 持続の把握に見られるような直接的で内的な認識を、ヘルクソンはのちに「直観 (intuition)」と呼ぶに至る。な

- お、直観という語が概念として具体的に用いられるようになるのは、一九〇三年の論文「形而上学入門」(« Introduction à la métaphysique »)以降である。
- (9) André Lalande, *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, Paris, PUF, 2002 (1926), article « nominalisme », pp.686-687.
- (10) *Ibid.*, article « conceptualisme », p.162.
- (11) ベルクソンは双方の見地を越えることを目指すが、最終的な立場は目的論に近い。「目的論の原理は本質上、心理的であり、非常に柔軟である。目的論は拡張可能であり、それによって広大になるので、純粋な機械論を退けた途端にその原理のいくらかを受け入れることになる。したがって、我々がこの著作で論述する主題は、ある程度は必然的に目的論の性質を帯びるだろう」(ECA0)。
- (12) 社会における諸傾向の進化を歩行のイメージによって表現するのは本稿の筆者自身の考えによるものだが、ベルクソンの思想と歩行のイメージとを結びつけた例はすでに存在している。古賀純子は、オリヴィエ・メシアンが規則的な軍隊のマーチを反自然的なものと考えていたことに触れつつ、メシアンの持つ自然な歩行のイメージがベルクソンの持続に由来するものであった可能性を論じている。古賀は、メシアンの言う「真の歩行」、不均質な秩序における自然な歩行に、ベルクソンの持続の特徴である異質性との関連を見ている(古賀純子「オリヴィエ・メシアンのリズム論とベルクソン哲学」、『美學』第五三巻二号、美学会、二〇〇二年、五三〜六五頁所収、六一〜六二頁参照)。

